マリア様に恋して！

快丈凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリア様に恋して！

【Ｎコード】

Ｎ１７６２Ａ

【作者名】

快丈凪

【あらすじ】

茉莉乃亜美（まりのあみ）、通称マリア。マリアはとある出来事から出会った男の子・三木慎弥（みきしんや通称シン）を好きになる。だが、幼馴染みの霧島煉（きりしまれん通称キリ）の事もなんとなく気になってて…

マリア様と携帯電話

『マリア』。
わたしのあだ名。
茉莉乃亜美（まりのあみ）を縮めてマリア。
そして私、マリアは悩んでいた。

目の前には携帯電話。
私のではない。わたしのはポッケにちゃんとしまっている。
なぜここに自分のではない携帯があるのかというと、１０分前に遡る。
１０分前、私は電車に乗っていた。休日だというのにがらがらの車内。
そのなかの空いた席に座る。
すると、いきなりバイブ音がした。
「？！」
ビックリする私。
携帯の存在すら気付いていなかったのでものすごく驚いた。
なぜか無意識に周辺に人が居ないか見回す。
居ない。
まだバイブは止まらない。
「で…出るべきなの？」
思わず声に出てしまう焦り。
するとバイブは止まった。
少しホッとして携帯を手に取る。
黒い外装。
私と同じ会社の携帯だ。
開いてみると、携帯に元から入っていたと思われる画像の待ち受け

画面。
さっきの着歴をみた。
『慎弥』とその下に『課長』という表示。男の…サラリーマンの物らしい。
「どうしよう…駅員さんに届けるべきかな…」
こういう場合は、やはり警察よりも駅員だろう。
降りた駅で渡そう…と思っていると、手元から振動が…
着信だ。見ると先程の『慎弥』という人から。
出てみるか…この人の事を知っている人かもしれない。
「…はい。」
「あの…どちら様ですか？」
若いんだか中年だか判断に困る様な微妙な声。
私は恐る恐る返す。
「すいません、私、電車の中で携帯を拾った者でして…持ち主ではないのですが…。」
すると電話の主は嬉しそうな声で、
「そうですか！その携帯、私のなんです！」
…本人？
「そうなんですか？さっき見つけて電話があったので出たんです。」
「そうでしたか。ところで、今はどこに？」
「これから県立図書館に行くところだったんですが…」
「そうなんですか！私の会社、近くなんです。図書館で良いので渡して頂けないですかね？」
「はい。分かりました。今からだと１０分ぐらいかかりそうですが…良いですか？」
「構いません。では、１０分後に図書館の前で。失礼ですがお名前を…」
「あ、茉莉乃亜美といいます。」
「茉莉乃さんですね。私は三木といいます。ではまた後で。」
「はい。」

通話終了…。ビックリした…。
１０分後…あと2分程で駅に着く。そこから図書館までは5分程。
本当はさっさと涼しい図書館に行きたかったけど…
「ま、いっか。」
…そして今に至る。
暑くて汗が出る。セミはうるさいぐらいに泣いている。

すると、少し遠くの方から足早に近付いてくる人が見える。
男の人。もしかしたら…。
手を振りながらこっちへ近付いてくる。まちがいない。
「やぁ、茉莉乃さん？」
「はい。三木さんですか？」
「そうです。ありがとうございます。いやぁ、助かりました。午後から取引先から大事な電話がかかってくるんだったんで。」
三木さんは本当に嬉しそうだ。
「そうだったんですか。あの…じゃあ、コレ…」
私はカバンから携帯を取り出して三木さんに手渡す。
そして、そっと顔を見てみる。
結構カッコいい。
年は…３０代前半だろうか…おじさんというよりはお兄さんという言葉の方がふさわしいように思える。
「あ、そうだ…」そう言いながら三木さんはポッケからメモ帳を取り出した。
「ここに住所と名前を書いてくれませんか？」
「えっ…」
「あ、別に変なことに使う訳じゃなくて、お礼がしたいんです。」
「えっ…そんな…別に大した事してないですし…」

「いや、本当に助かったんです。そう言わすに…」
三木さんはメモ帳とペンを差し出す。

…書かないと返してもらえないな…。
私はペンを受取り、メモ帳に住所と名前を書く。
「それじゃあ、これで…」
「ありがとうございます。それじゃあ、また後日。」
「はい。それでは。」
…変な日…。
立ち去る三木さんを見ながら私はそう思った。
「そうだ、図書館図書館。」
そう言いながら私は図書館へ向かった。
ジリジリと日が照りつける、暑い暑い休日。
茉莉乃亜美。高校2年生。なにかが始まりそうな、夏休み前の休日だった。

マリア様と携帯電話（後書き）

新連載です。１話だけだと、『どこが恋愛小説だ！』と怒られそうですが、２話からだんだんそれらしくなります。話数を重ねる事に恋愛小説らしくなるようにがんばります！
ご感想やアドバイス、是非下さい。それではまた２話で…。

マリア様の出会い

私は茉莉乃亜美。通称マリア。
私は3日前、三木さんという人の携帯を拾い、届けた。
三木さんはカッコいいサラリーマンでお礼がしたいと私の住所を聞いた。
あれから3日…なんの音沙汰もなし。
私はクーラーのきいた自分の部屋へいた。
3日前、図書館から借りてきた本を読んでいる。
あの日は本を借りるために図書館へ出かける途中だった。
私は本が好きだ。
ジャンルや流行などは関係なく、面白そうな物はとにかく読んでみたい。
実際、この前借りてきたのは歴史小説とエッセイ。ちなみに今は外国の小説を読んでいる。
「…なんにもないじゃん…。」
わたしはそう呟きながら本から目をはなし、『う〜ん…』とのびをする。
別にお礼を期待していたわけじゃないけど、なんにもないという事に少しガッカリしていた。
ふと窓の外を見る。
今日も相変わらず暑い。
閉めきった窓の外では、セミが鳴いているのだろう。かすかに聞こえる。
今日は家に私一人だ。
お母さんは保育士をしていて、今日も仕事。
お兄ちゃんは大学のアウトドア同好会でキャンプ。妹は友達とプールへ行ってしまった。

お父さんは単身赴任で今年の４月からドイツ。
「あーあ。つまんないの。」
また声に出してみた。
すると、コンコンと窓を叩く音。
「またアイツか…」
私はぼやきながら窓へ近付く。
ガチャッと窓を開けた。
外のムンムンした空気が入り込む。
そして、窓の外へ立っている人物を見て、溜め息をつきつつわたしはぼやいた。
「やっぱり…。」
「なんだよその言い方！っていうか俺以外に来ないだろ。」
「…まぁ…。っていうか暑くなるから早く入って。」
「はいはい。お邪魔しまぁす。」
入って来たのは、幼馴染みの霧島煉（きりしまれん）。通称キリ。
「んで？」
私はうんざりしたように聞く。
「んでって？」
「んでって？じゃないわよ。用件は？」
「そんなに怖い顔すんなって。あのさ、ウチんち今改装中じゃん。」
「そうね。真っ昼間からいい近所迷惑だわ。」
わたしは皮肉を込めていい放つ。
「ひっでぇな。それで今クーラー使えないから涼みにきたの。」
キリはぬけぬけと言う。
「ったく…図々しい…」
「いいじゃん。今、一人なんだろ。」
「それが分かっててよく来れるわね。女子高生の部屋に。」
「マリア、そんな奴かよ。心配すんな別に何もしないよ。」
ふざけたようにわらうキリ。
「そんなことしたら炎天下のアスファルトの真上に放り出すわよ。」

わたしは冷たくいい放つ。
「おぉ怖い。そんなんだから彼氏出来ねぇんだぞ。」
「あんたもいないじゃん。ホラ、静かにしてよ。これから宿題するんだから。」
しっしっと手を振りながら私は勉強机へ向かう。
本当は本の続きが読みたかったけど、こいつの前では読みたくない。
どうせ、『また本読んでるのか？』とからかわれるのがオチだから…。
「宿題ねぇ…そんなに華風は厳しいのか？」
「私は計画的なのよ。それに華風と星修は違うの。」
「ふぅ～ん…」
そう言いながらキリはぐるっと部屋を見渡し、
「ま、どーでもいいけどね。」
と言って横になる。
私は生まれた時からキリと一緒だ。
私とキリは同じ病院で生まれた。それも1日違いで…。
元々隣同士仲が良く、同い年ということで私たちは小さい頃からずっと遊んでいた。
また、屋根づたいでお互いの家を行き来できるのというのもよく遊ぶ原因だった。
キリにはお姉さんがいる。
綺麗で優しくて…私は大好きだったが今はお嫁に行ってしまい、いない。そのせいか近頃はよくやって来る。
寂しいんだろうな…と思う。
なんせお姉さんが嫁いだのはほんの1ヶ月前。まだ慣れないんだろう…。
そう思うと少し哀れな気もするが、生まれてから17年も一緒だとさすがにうんざりしてくる。
幼稚園から中学まで同じ学校、同じクラスだった。嫌がらせかと思うほどに…

高校はさすがに離れたいと思い、あえて女子高にしたが、キリは男子高だった。
高校生になって、それまでよりは会わなくなったものの、今でも朝は同じ電車だし、高校も近くだ。
おまけにお姉さんの事と夏休みが重なって、また最近はよく一緒にいる。
キリは嫌いではないが、私をからかうキリは嫌いだった。
マリアというあだ名もキリが付けた。キリは私が名付けたけど…。
そんな事を考えていると、玄関からチャイムが聞こえてきた。
「誰か来たみたい…。」
「新聞の勧誘じゃないの？」
キリがふざける。
「はいはい。どーでもいいけど行ってくるから。」
そう言いながら2階の私の部屋を出て、玄関へ行く。熱風が私を包む。
「はぁい…。」
ドアを開けると、男の子が立っていた。
妹・美野里（みのり）の彼氏かと思った。
美野里は2つ年下だが私よりマセているから…。
ところが、男の子は意外な事を言った。
「えっと…茉莉乃亜美さんはおられますか？」
「亜美は私ですが？」
「あ、三木慎弥（みきしんや）と言います。先日は父がお世話になりました。」
そう言って男の子は頭を下げる。
私はびっくりした。
あの若そうなサラリーマンに、こんな大きな子供がいたなんて…。
男の子は私をよそに話を続ける。
「それで、これ、お礼と言ってはなんですが…良かったら使ってください。」
そう言って紙袋を私に渡す。

「本来なら父が直接来ればいいんですが、急に1ヶ月海外出張になってしまって…。」
「そうなんですか…ありがとうございます。」
男の子を見てみる。
なるほど、どこかあの三木さんに似ている。
目だろうか…でも三木さんよりしっかりしていそうな印象。
「あの…」
「はい？」
失礼だとは思ったが、気になったので聞いてみた。
「失礼ですが…お父さんっていくつの方ですか？すごく若く見えて…。」
「あぁ、３９歳です。来月で４０歳…。若いですか？」
「えぇ。３０代前半に見えました。」
「ははは。父に伝えておきます。亜美さんは何年生です？」
「私は高２です。」
「あ、ならタメですね。俺は星修高校の２年です」
「星修？わたしは華風華風です。近くですね。」
「ほんとですね。あ、それではこの辺で失礼します。今回は本当にありがとうございました。」
「いえ。こちらこそ気を使わせてしまって…お父さんにお礼言っておいてください。」
「はい。それでは。」
そう言って、慎弥君は去っていった。
爽やかで、いまどき珍しい礼儀正しい人だ。
紙袋の中をみる。形からしてハンカチかなにかだろう。
慎弥…この名前…どこかで聞いた気がする。
「あっ…電話の…」
電話の着信表示にあった”慎弥”は彼で、三木さんは息子の携帯で電話をかけていたのだ。
納得しながら私は部屋へ戻る。

慎弥君か…。カッコよかった。
階段の踊り場に、キリがいた。少し不機嫌そう。
「今の男、誰？」
「えっ？聞いてた？この前電車で携帯拾って届けたら、息子って人がお礼に来てくれたの。」
「三木慎弥…」
「なんだ、キリ、知ってるの？そっか、同じ学校だもんね。」
「…俺、アイツ嫌いだ。」
そう言いながらキリは階段を下りる。
「あれ？帰るの？」
「トイレ。」
そう言ってそそくさとおりてしまった。
そっけないな…。ま、いっか。
お礼ももらったし、”慎弥”も見れたし。
茉莉乃亜美。ちょっといつもと違う夏の予感がする、高校2年の夏休み1日目だった。

マリア様の出会い（後書き）

第2話にしてやっと重要な人物が出せました…が、まだ恋愛っぽくないですね…3話では必ず…！
ご感想・アドバイス、励みになります！あれば是非下さい！（もちろん、ご指摘も励みになります！）
それではまた3話でお会いしましょう！

マリア様と初恋

私は茉莉乃亜美（まりの あみ）。通称マリア。
夏休み、とあるサラリーマンの携帯を拾って届けたらその息子がお礼に来た。
そして私は…その人・三木慎弥（みき しんや）が頭から離れなくなっていた。
ただ、ひとつ気掛かりなのは、幼馴染みの霧島煉（きりしま れん）ことキリが、『アイツ嫌いだ。』と言った事。
同じ学校のようだし、なにかあったのかもしれない…。ま、私には関係ないけどね。
私の通う私立・華風（はなかぜ）女子高校は、夏休みを迎えて1週間が経った。
ちなみに、キリや慎弥君が通う私立・星修（せいしゅう）男子高校は私たちより3日早く夏休みを迎えていた。
あの携帯を拾った日からは1週間と2日…
相変わらず外はむし暑い。だからといって部屋のばかりではつまらない。
私はまた図書館へ行く事にした。この前借りた本も読んだことだし…。
駅で電車を待っていると、電話が来た。
友達のヨハネこと三好夜羽（みよし よはね）だ。（ちなみにヨハネは本名）
「はい。ヨハネ？どうしたの？」
「なんか暇で電話したの。マリアは何してるの？」
「これから図書館行くとこ。」
「相変わらずねぇ。他に予定なければ、待ち合わせして遊びに行かない？」
「あ、良いよ。何時くらい？じゃあ1時間後ぐらいでどう？私が図書館行くから。」
「了解。待ってるね。」
「行く頃にメールする。」

「はいはい。じゃあね。」
電話を切る。…相変わらずはどっちなんだか…。
ヨハネは小学生からの友達だ。
マリアとヨハネなんて聖書みたいで不思議だというキッカケで仲良くなった。
ヨハネは私と違っていて読むのは本ではなくファッション雑誌、というまさにイマドキの女子高生だった。
ま、私が珍しいだけかもしれないけど…。
そう思いながら電車に乗る。
夏休みだからか、人はまばら。でも、やはり1週間前を思い出す。
慎弥君…カッコよかったな…せめてメアドくらい聞いとくべきだったか…。
そんな事を思っていると、あっというまに着いてしまった。
駅を出ると、相変わらずジリジリと照りつける陽射し。さっさと図書館に行こう…。
私は足早に図書館へ向かった。
県立図書館の中は外とは別世界でとても涼しかった。
私はカウンターで返却手続きを済ませ、本棚を物色することにした。
今日の気分は小説。どうせなら読みごたえのありそうな分厚いのを借りるか…。
探していると、ちょうど良さそうな本があった。
ちょっと古めな感じで、ページ数も多い。これにしよう。
時計を見る。約束まで30分はある。読みながら待つか…。
そう思っていると、ふいに声をかけられた。
「もしかして、茉莉乃さん？俺だよ、慎弥。」
振り返ると、慎弥が立っていた。
「奇遇だね。本借りるの？」
こくんと頷く。
「あ、その本借りるんだ？俺、読んだことあるよ。面白かった。」
「そうなんだ。なんか楽しみ。」

「それは良かった。あ、今日は一人？」
「今はね。でも３０分くらいしたら友達が来るの。」
「そうなんだ…」
慎弥君は、なぜか少し寂しそう。
「慎弥君は？一人？」
「そうだけど、本借りる以外に用は無いから。」
「そうなんだ…。」
「あのさ、」
慎弥君は少し微笑みながら、
「俺のこと、シンって呼んで。みんなそう呼んでるんだ。」
「シン？分かった。じゃあ、私のことはマリアって呼んで。」
「マリア？」
「茉莉乃亜美だから縮めてマリア。小学生の時からのあだ名なんだけど、何となく気に入ってるし、定着してるから、そう呼んで。」
「マリアか…聖書みたい。」
シンは小さく笑う。
「でしょ。私もそう思う。で、友達は本名でヨハネっていう子がいるの。」
「マリアにヨハネか。すごいね。」
「うん。改めて考えるとすごいかも。」
そう言って私はクスクス笑う。
シンもつられて笑う。
「マリアなんてあだ名、一体誰が付けたの？」
「あ、霧島煉って幼馴染み。シンは星修だよね？ソイツもなんだけど、知ってる？」
すると、シンはなぜか顔を歪めた。
「キリだろ。知ってる。そうか、幼馴染みか…」
「うん。家が隣同士で、家族ぐるみで仲いいんだ…」
するとシンはまた微笑んで、
「そうか。キリとは同じクラスなんだ。だから知ってるよ。」

「そうなの？」
キリ、そんな事一言も言わなかったし…。
すると、私の携帯のバイブが鳴る。
「シン、ちょっとごめん。携帯鳴ってる。」
ヨハネからのメールだ。
《暑くて死にそう…そろそろ行くから分かりやすい所にいて。》
分かりやすい所ねぇ…。玄関付近に行くか…。
「待ち合わせしてる友達が、そろそろ来るみたい。この本借りて玄関の辺りに行かなきゃ。」
「そっか。俺もこの本借りるし、そろそろ行くかな。」
「じゃあ、貸し出しカウンター行こうか？」
「うん。」
私たちはカウンターへ向かった。二人並んで歩いていると、まるでカップルのようだ。
…まぁ、図書館でデートってのもなかなかいないけど。
二人で本を借りて玄関に行くと、ちょうどヨハネがいた。
「あ、友達？」
シンは私に訪ねる。
「そう。例のヨハネ。」
ヨハネは私たちに近付いてくる。
「マリア、久しぶり。暑かった…この人は？誰？」
「あ、三好慎弥君。この前シンのお父さんの携帯拾って届けたら知り合いになったの。」
私はシンをヨハネに紹介する。
「三木慎弥です。じゃあ、そろそろ行くね。また今度。」
そう言うとシンは歩き出す。
「うん、またね。」
私は玄関へ歩き出すシンへ声をかける。
すると、ヨハネはびっくりしたように言う。
「マリア、三木慎弥と知り合いなの？」

「うん。だから見てたでしょ。どうして？知ってるの？ヨハネ。」
「星修の三木慎弥っていったら、１年で生徒会長やってるって有名な人じゃん！…マリアこそ、知らなかったの？」
「そうなの？知らなかった…そんなすごい人なんだ…。」
「まさか、付き合ってないわよね？」
ヨハネは疑うように尋ねる。
「まさか。１週間前に携帯のお礼で来たぐらいだよ。今日も本探してたらたまたま会ったの。」
「ならいいけど、もし彼女になったら大変よ。彼、ファン多いから…。」
「…ヨハネも？」
「う～ん…私は少しタイプじゃないかな。にわかファンって事で。」
「そう…。」
確かにカッコいいし、普通の男の子とはちょっと違うと思ったけど…。
「そうだ、マリア、三木君のメアド聞いといてよ。」
「えっ…なんで？」
「彼、カッコいいじゃん。人気あるし、マリアの友達って言えば教えてくれるわよ。はいはい、これアドレス。」
そう言ってヨハネは私にメアドが書いてあるメモを渡す。
準備いいなぁ…。
と思いながらメモをカバンへしまう。シンに、次会えるのはいつだろう…。
「さ、結構涼んだし、そろそろ行こうか？」
「うん。」
こうして図書館を出た。
相変わらず太陽は照りつけ、セミはうるさいけど、私の心は穏やかだった。
私たちはその後、ウインドウショッピングを楽しんだ。
金欠の女子高生には衝動買いするほどの余裕は無いが、こうして友

達と服や小物などを見ているのは楽しかった。
特にお互い用もなかったのだが定期があるから出掛けて、見て楽しむ。これは休日でも平日でも同じだ。
そうしていると、あっという間に時間が経っていた。
「げっ…もうこんな時間…。」
時計をみて、私は時間の経つ早さに驚く。
「ホントだ…ずいぶん経ったね…帰る？」
「そうしないとマズイわ…今日お母さん早いし。」
わたしの母は保育士をしているが、夜間保育の当番が１週間に４日あるので、早く帰る日は家族でご飯を食べる事にしている。
「そっか、お母さん早い日か…。なら帰んないとね。私はもう少し見たいとこ見るわ。」
「うん。ごめんね。また遊ぼ。」
「うん。またメールする。じゃあね。」
「バイバイ。」
わたしはヨハネと別れた。
そして駅へ少し早足で向かう。
今からなら１０分後に発車する電車に間に合うかもしれない。
駅へ着いた。５分前…なんとか間に合った…。
電車へ乗り込む。さすがに今は帰りの時間帯なので、人は多い。
疲れたし、座りたかったけど…ま、１５分ぐらいだからいいか…。
手すりのあるドア付近にいく。…せめて手すりにつかまろう。
すると、また聞き覚えのある声が私を呼んだ。
「あれ？もしかしてマリア？」
「シン！」
声の主はシンだった。わたしの掴む手すりの下の席に座っている。
「あれ…確かあのあと帰ったんじゃ…。」
「帰ろうとしたら、友達と会ったんだよ。それで遊んでたら今帰り。マリアも？」
「うん。なんかすごい偶然。１日に２回も会うなんて。」

「だな。」
そう言って笑うシン。すると、立っている私に気付き、
「座りなよ。」
と言って立ち上がる。わたしは遠慮がちに
「いや、悪いよ。１５分ぐらいだし…。」
と言う。しかし、シンは微笑んで、
「俺は１０分で着くから。」
と、わたしを座らせた。これは、かなり助かった。
「ありがとう。優しいんだね。」
とお礼を言う。
「そんな、俺の方が近いんだし、当たり前だよ。」
とあっさり言った。…当たり前…絶対キリはしないな…。
そして、私はふとヨハネとの約束を思い出した。
「あ、シン、今日ね、友達いたじゃない？」
「あぁ、例のヨハネ？」
「うん。その子がね、シンのメアド知りたいって。それで、これヨハネのメモなんだけど…。」
私はそういいながらカバンからメモを取りだし、シンに渡す。
「ふぅ～ん、まぁ、メールしとく。でも…」
シンは言葉を濁す。
「でも？」
「俺、マリアのメアドの方が知りたいな。」
シンは真顔で言った。
…それって…。私の方が興味あるってこと？ダメだ、つい深読みしてしまう…。
「メアド？良いよ。シンのも教えてよ。」
私は普通の状態を装い、自分の携帯を取り出す。…深い意味は…ないよね？
するとシンは少し困ったように笑いながら
「うん。アド打つよ。」

と言って、私の携帯に自分のアドレスを登録しはじめた。
「家着いたらで良いからさ、メールして。」
そう言ってシンは私の携帯を返す。
「うん。ありがとう。」
私はドキドキしながら受けとる。…このドキドキが伝わりませんように。
すると、車内アナウンスが流れた。
「あ、俺、ここなんだ。じゃあ、またね。」
「うん。メールする。またね。」
シンは電車を降りた。ドアが閉まる。シンは見えなくなった。
私は携帯のアドレス帳を見た。シンは4人目の男の人のアドレスだった。
お父さんと、お兄ちゃんの聡留(さとる)と、キリの次のアドレス。
『三木慎弥』という名前を見て、胸がキュンと少し痛んだ。
…好きなんだ、私。シンの事。
結局、胸のドキドキと小さな痛みは、電車を降りるても続いていた。
茉莉乃亜美、初めて好きな人ができた高校2年生の夏休みだった。

マリア様と初恋（後書き）

いかがでしたか？やっと恋愛モードです。キリとの絡みがありませんでしたが…（苦笑）
感想やアドバイス、ありがとうございます。これからも頑張ります。
それでは４話でまたお会いしましょう。

マリア様の恋心（前書き）

はじめに、前回の３話の中で、重複していた部分があり、大変失礼しました。その後正しく修正しました。読者の皆さんを混乱させてしまい、申し訳ありませんでした。今後この様な事のないように気をつけます。　快丈凪

マリア様の恋心

ドキドキしながらボタンを押す。短く本文を打って、送信する。静かに携帯を閉じた。
私は茉莉乃亜美。あだ名はマリア。
今、メールを送った。
今日聞いたばかりのシンこと三木慎弥君の携帯に…。
私は、どうやらシンに恋してしまったらしい。
もっとも、今までそんな感情を抱いたことがないので、よく分からないけど…。
さっき…シンとわかれたあと、駅から家まで…どの道を通ったかすら分からない。それくらい、ドキドキしていた。
そして、さっき…メールを送った。返事、くれるかな…。
すると、急に携帯が鳴る。シンからのメールだ。
受信ボックスを見る。そこには、
『マリア、メールありがとう。初メールだね。今、何してたの？』
とあった。
私は急いで返信した。
『私は今部屋でくつろいでるよ。シンは？』
送信。
パタンっと携帯を閉める。
なんだか、少し感動する。
今、こうしてシンも携帯のメールをみているんだ…。しかも、私の送ったメールを。
そう考えると、なんかメールって凄いと思う。
そんな時、窓を叩く音がした。…多分…いや、確実にアイツだ。
本当はムシしたかったけど、後からガミガミ言われたくないので、仕方なく窓を開けた。
案の定、キリこと霧島煉だった。

「なによ、なんか用？」
私は冷たく言い放つ。
「なにそれ…俺が来たらマズイ？どうせ暇だったんだろ。」
すこしたじろぎながらもサラッと言うキリ。それに少しカチンときた。
「用が無いなら閉めるわよ。」
と、窓を閉めようとした。
「あっ、タンマ！あるある、ありますっ！だから入れて…。」
そう言って、サッと部屋に入ってきた。…なかば、本気で閉めるところだった…。
「んで？何の用？」
「あのさ、明日、花火大会あるの知ってる？」
「花火大会？」
「そっ。明日、あるんだけど…行かない？」
「行くって…2人で？」
「そぉだよ。文句ある？」
「なにそれ…デートみたいじゃん。」
私はキリから目をそらす。…なんで？なんでちょっとドキドキしてるの？
「…デートのつもりだけど？」
…ウソ…。…つまり…？それは…。
「あのさ、冗談は顔だけにしときなさいよ。」
私は目をあわせないようにしつつ、何も知らない様な声で答えた。
キリに背をむけて座る。
…びっくりした…。でも…これって…告白？
ちょっと沈黙。
その時、携帯が鳴った。シンから。
「携帯…誰から？」
キリが尋ねる。
「シンから。…何？気になる？」

「お前さ、シンが好きなのか？」
…ストレートに来るねぇ。そうだよ。悪いか。
「…だったら何よ？」
「あのさ、お前騙されてる。アイツはお前が思ってるようなヤツじゃない。」
「…なんで？良い人じゃない。優しくしてくれるし、少なくてもあんたよりは気が利くわよ。」
好きな人を否定された…。
それが悲しくてムキになる。携帯を手に取ってメールを読む。…キリは何も言わない。
シンのメールには、
『俺も部屋だよ。そうだ、マリアは明日花火大会あるの知ってる？もし良かったら行こうよ！』
…とあった。
…どうしよう…。シンと行こうか…。でも…先に誘ってくれたのはキリだし…。
迷っているといきなり後ろからがっしりとした腕が私に抱きついてきた。
「…キリ…？」
キリは何も言わない。ただ、キリの胸の鼓動が聞こえる。私までドキドキしている…。
「好きだよ。マリア。ずっと前から…。」
耳元で囁かれる。
…だめだ…力が抜けてふりほどけない。
でも…私はなんとなく分かった。ふりほどけない理由がもう一つある。
「キリ…ごめん。」
私は泣き出してしまった。涙が溢れだした。
それに気付いたのか、慌ててキリは私から手をはなす。
「マリア！ごめん…。泣くなよ。分かったから…。」

慌てるキリ。
「ごめん…。俺、帰る。…本当にごめん。」
そう言って、キリは肩を落とし、窓から出ていった。
…分かったんだ。
私は、多分シンと同じくらいキリも好きだったんだ…。
小さい頃から側にいて…気付かなかっただけなんだ…。
でも…さっき抱きしめられて分かった。
そしてその事が…あまりにも残酷すぎて…泣いてしまった。
私はシンが好き。
でも…キリも好き。
どっちの感情にも違いがない。
…その事が…真剣に告白してくれたキリに悪くて…ごめんって言ったんだ。
携帯を見る。メールをうつ。
『ごめんね。私は、明日用事があるから花火大会行けない。ごめん。』
と打って送信した。
ダメだ…これじゃあ、どっちに対しても失礼だ。
私は携帯を閉じ、ベッドに横になった。
…どうすれば良いんだろう。この気持ち。
そんな事を考えてうとうとしていたら寝てしまった。
うっすらと、とおのく意識の中で、携帯が鳴った気がした。
…チュンチュンとスズメの鳴き声がする。
目を覚ますと、もう辺りは明るくなっていた。
…寝ちゃったんだな…。ボーッとしつつも携帯を見ると、メールがある。シンから。
そこには、
『そうか、残念だな。また会おうね。それでは、夜も遅くなって来たのでおやすみ。』
とあった。どうやら、返事を送る必要は無いらしい本文。

良かった…ムシしてたと思われなくて。
ホッとしつつも、なぜか心の奥には罪悪感のようなものが残っていた。
キリにシン…どうして両方好きになったんだろう。
どうして両方が好きだと気づいたんだろう。
やりばのない思いを抱えて、私は本に手をのばした。…本を読もう。
私は起き上がり、本を読むことにした。
そして物語に没頭しながら、昨日の思いと出来事を忘れることにした。
茉莉乃亜美。高校2年生。あまりにも切なすぎる思いを知った夏休みだった。

マリア様の恋心（後書き）

いかがでしたか？マリアが恋心を感じはじめました☆最終的にはどちらと結ばれるのかはまだ不明です（苦笑）でも、登場人物たちがみんな幸せになれる終りにできるようにこれからもがんばります！それではまた５話でお会いしましょう！

マリア様と花火

私はマリア。
もちろんあだ名だけど。
私は昨日、ある気持ちに気付いた。
私は幼馴染み・キリと、最近知り合った男の子・シンの二人に恋してしまったということだ。
二人を思う気持ちに違いは感じられない。二人とも同じぐらい好きなのだ。
今日は夜から花火大会だ。
私は二人にそれぞれ誘われた。
でも…キリから告白され、キリへの気持に気付いてどちらも断ってしまった。
今日は朝からどしゃ降り。結局花火大会は中止になってしまったらしい。
私は内心ホッとした。
なぜか分からないけど…。それにどちらと行ってもぎこちなくなるのは目に見えていた。
私は午前中に今日の分の宿題を終らせ、今はずっと読書をしていた。
読書は勿論楽しいからしているのだが、半分くらいは気を紛らしていた。
すると、なんだか眠たくなってきた。
そういえば、昨日はキリやシンの事を考えながら寝た。
だからなかなか寝つけなかったので、気がついたら朝…というようなカンジだった。
私はベッドにドサッと倒れ込み、そのまま寝てしまった…。
「おい、亜美！いつまで寝てるんだよ！夕飯だぞ！」
お兄ちゃんの聡留（さとる）に怒鳴られて、私は目覚めた。ゆうに3時間は寝ていた…。

「…もうご飯？」
「そうだよ。ほら、今日は母さんも居ないんだから。」
「…いっつも居ないじゃん。」
「昨日は居ただろ。ほら、早く来いよ。」
「はぁい。」
下に降りると、妹の美野里（みのり）が
「もー、お姉ちゃん遅すぎ。後、寝すぎ。」
「ごめんってば…」
「また本読んでたの？よく寝不足になるまで読めるねぇ。」
美野里は信じられないという目でこっちを見る。
「あんたは読むのって雑誌ばっかじゃん。そんな人に言われたくありません。」
美野里は何か言おうとしたが、お兄ちゃんに遮られた。
「はいはい、低レベルな争いは終わり。めしにするぞ。」
お兄ちゃんは強引にテーブルへカレーの入った皿を置いた。
私たちは闘争心よりも空腹が勝り、ケンカは終わった。
「美野里、美味い？」
お兄ちゃんが美野里にちょっとハラハラした様子で聞いた。
今日の料理当番はお兄ちゃんだったからだ。
「…不味くはないけど…不思議な味が…。」
「あぁ、それは隠し味だな。」
「…何入れたの…？」
少し嫌な予感がして聞いてみた。
「いや、テレビでやっててさ…美味しいって…インスタントコーヒーをちょっと…」
「コーヒー？！コーヒー入れたのっ？」
「でもさぁ…コーヒー入れるのって結構知ってるし食べたことあるけど…こんな味だったかなぁ…」
美野里は不審そうに言った。
「それが…」

お兄ちゃんが申し訳なさそうに声を出した。
「実はコーヒー入れすぎて…何とか味を直そうと…」
「今度は何入れたのっ？！」
私は少し焦って聞いた。
「…粉末のコーヒー用ミルクを少々…」
お兄ちゃんは苦笑い。私たちは唖然。
お兄ちゃんは大学1年生でアウトドア同好会に所属している。
そのせいか、いつもお兄ちゃんが料理を作るときは予想できない事をする。
「そっか…この味はコーヒーとミルクか…」
私はどこか納得した。この不思議な味の正体が分かったら、なぜか安心した。
どうやら美野里もそうらしい。私と美野里は声を出して笑った。
お兄ちゃんは少し憤慨したように、
「なんだよ…一応食えるんだから良いじゃんか！そんなに笑うなよ…」
私は笑いを少し抑えて、
「ははは！ごめんごめん！カレーにコーヒーとミルクって発想は無かったから！」
と大爆笑して、美野里も
「お兄ちゃん、隠し味は隠さないとだめじゃんっ！」
と笑っている。
お兄ちゃんは照れ隠しに話題を変えた。
「そういえばさ、キリは元気？」
「へっ？どうしたのよ。急に…。」
いきなりキリの名前が出てきたことに驚いた。
「いや、最近会わないし、なによりアイツ、ヤバいって聞いたし…。」
「ヤバイ？それってどういうことよ？」
お兄ちゃんはキリやシンの通う高校の卒業生だ。

「いや、キリって、生徒会に反抗するグループのリーダーなんだって。」
すると、美野里も話に割り込んできた。
「生徒会に反抗？なんで？」
「まぁ…気持も分かるけどな。」
「どういうことなの？お兄ちゃん！」
「あのな、」
お兄ちゃんはやれやれと言った表情。
「星修には生徒会とそれに反抗する反生徒会に分かれてるんだ。」
「なにそれ…なんで内部分裂みたいになってるの？」
「星修の生徒会は強引なんだ。例えば普通って3回遅刻したら成績表には1欠席って付くだろ。」
「…うん。」
「星修は1欠席じゃなくて3日間の自宅謹慎なんだ。」
「なにそれ…無茶苦茶じゃん…」
私とお兄ちゃんの会話にイマイチついていけない美野里は首を傾げる。
「高校って3回遅刻したら1欠席なの？でも謹慎なら最終的に欠点にならないじゃん。」
「そう思うだろ？それがツボなんだよ。」
「どういうこと？」
美野里は怪訝そうに聞く。
「成績表に欠点はつきにくいさ。でもな、内申書だと謹慎の方が響くんだぞ。」
「そうなの？」
「だって、普通なら退学とか留年するけど、そうならないでいざ進学やら就職するときにかなり困るんだよ。」
「そっか…。でも、それって先生は何も言わないの？」
「生徒会は先生よりも明らかに優位だな。私立だから辞められたら困るしな。」

「そっか…。」
キリとシンの仲が悪い理由が分かった。
生徒会長と反生徒会リーダーなら…仲も悪いよね…。
「じゃあ、お兄ちゃんはどっちの味方だったの？」
美野里がたずねる。
「俺は生徒会。やり方は汚いけど、目付けられると怖いからな。」
「やっぱり…長いものに巻かれるんだ…。」
美野里は呆れ顔。
「そんな事言ったって…ま、しょうがないじゃん。卒業しちゃったし。」
…ということは、キリはシンと対立してて…キリはお兄ちゃんと違って戦ってる…。キリはすごいんだな…。
私は夕飯を食べたあと、部屋へ戻った。キリとシンの事を考えていた。
そのとき、窓を軽く…どこか遠慮がちに叩く音がした。
「キリ…！」
キリが少し元気の無さそうな笑みを浮かべた。
「あのさ、昨日のこと…謝りたくて…。仲直りしないか？オレ、このままギクシャクしたくないんだ。」
キリは真顔で言う。
「うん…もう良いよ。何とも思って無いし…。」
「ホントに？なら…もう昨日のことは忘てな！」
「うん。」
私達は笑いあった。
そして、キリは子どもっぽい顔で後ろに隠し持っていたあるものを取り出した。それは…
「花火…」
「ほら、ホントは今日だったけど、夕方まで降ってて中止になったろ、でも今はなんとか晴れてるし…。」
外を見ると、雲はあるが雨は止んでいる。

「…じゃあ…やろっか？花火…。」
「マジで？！うん、やろう！」
パッと明るくなるキリの顔。
「よし、んじゃあ、外行こっか。」
「よし。オレ、マッチとロウソク持ってくる！」
「うんっ！」
そうして、私たちは私のうちとキリのうちの間の辺りで花火をした。量はそんなに多くなく、中にはしけっているのもあったけど…。最後に余った線香花火をしながら、ふとキリを見る。キリって…こんな顔だっけ…。かなり大人っぽくなった。手も大きい…。
「何？なんか付いてる？」
「えっ？いや、別に。」
…なぜか慌てて顔を背ける。胸がドキドキしている。顔も熱い…。茉莉乃亜美。高校２年生。二人っきりの花火にドキドキする、雨上がりの夏の夜だった。

結ばれたマリア様

私はマリア。キリが好き。でも、同じくらいシンも好き…。
でも、この前キリと二人で花火をしたとき…すごくドキドキした。
…私はキリが好きなのかな…。
夏休みも終りに近付いてきたある日、携帯に1通のメールが届いた。
シンからだった。
『話たいことがあるから会えない？もし良かったら図書館に来て。』
という内容だった。
話たいこと…なんだろう…。
そう思って用意をしていると、キリがやって来た。
「どっか行くの？」
相変わらず人の家も自分の家みたいにしている。
「そうよ。」
ワザとあっさり返す。
「誰と会うんだ？もしかしてシンか？」
…カンのいいヤツめ…。
「…まぁ…呼び出されたんだ…。」
なぜかシンに会うことがキリに悪い気がして目をそらした。
しかしキリは以外にも
「ふ～ん…あっそ…。」
と興味薄だった。
ま、別にいいんだけど…。
ちょっと拍子抜けしたけど、私は家を出た。シンが私にしたい話…
なんだろう…。
私は待ち合わせ場所の図書館へ急いだ。
入ってスグの所にある、読書スペースでシンは本を読んでいた。入
ってきた私を見つけ、近づいて来た。
「やぁ、来てくれたんだ。ありがとう。」

「ううん…。別に、ヒマだったし。」
「そう…んじゃ、でよっか？この本はもう借りたし。」
「うん。」
そうして私たちは図書館を出た。
ギラギラと陽射しが眩しい。夏休みも終わりとはいえ、まだまだ夏だった。
「んでっ？話ってなあに？」
私はシンに聞いた。
「…えっと…。」
シンは少しうろたえる。でも、こっちを真っ直ぐ見て一言告げた。
「マリア、好きだよ。初めて会った時から…。」
…えっ？！…
「シン…？今…何て…？」
「マリアが好きだよって…言った…。」
「…シン…。」
これは現実なんだろうか？本当にシンが言っているの？
「…マリアは…俺がキライ？」
「キライじゃないよ。…ただ…」
「…ただ…？」
なぜか分からないけど口が勝手に動いていた。
「…ごめん…。シンとは付き合えない…。」
…なんで？私…。
シンの事、好きなはずじゃない…。なのに…。
でも、心の底で、それはダメと止める声がする。なぜだろう…。
そんな私に、シンが問いかけた。
「…なんで？やっぱりマリアは…キリが好きなんだね。」
少し寂しそうな顔。
「…よく分からないの…。…でも、シンとは付き合うとか…何か違う気がする。」
「…そう…。」

そう言うと、シンは急に怖い顔で言った。
「…マリアは知ってるの？オレとキリの事…。」
「シンは生徒会長でキリは反生徒会の会長なんでしょ？」
「そう…。マリアは…どう思う？」
「どうって…私は星修の事はよく分からないけど…。生徒会は…やりすぎなんじゃない？」
「…そっか…。マリアもそう思うのか。…残念だよ…。」
そう言ってシンは目を背けた。
「…だって…謹慎の事とか…。他にもイロイロやってるんでしょ？」
「俺はね、」
シンは話だした。
「キチンと出来ないヤツが嫌いなんだよ。服装だって、学校生活だって…だから、ちょっと手を加えただけさ。なのに…マリアにそう言われるなんて…心外だよ。」
「…シン…。」
「もういいさ。マリアがそっち側の人間だって分かっただけで諦めがついた。」
シンは私に背を向けて歩き出した。
「じゃあね。マリア。」
手をヒラヒラと振り、こっちを振り向きもしない。
なぜか、その姿を見て、ホッとした。…私はこの人を選ばなくて良かった…と。
シンへは不思議と怒りや悲しみは無い。かえって清々しい。
そして、今、はっきりと分かった…。
―…私はキリが好きなんだ…！―
私は電車に飛び乗り、急いで家へと帰った。
…どうしてかは分からないが、今、スグにキリの顔がみたい…！
必死に走った。夕暮れは大分涼しくなったけど、汗が吹き出す。
「おい、マリア…？」
いきなり後ろから声がした。―…キリだった。

「キリ！」
「どうしたんだよ…？汗びっしょりじゃないか…。」
キリは心配そうに私の顔を覗きこむ。私は息を整える。
「…マリア…？」
…言おう。
今、言おう。
今、言わなきゃ。
「…キリ…」
私は顔が熱いことに気付いた。多分理由は二つ。走ったからと…キリのせい…。
「私、この前キリに告白されたとき、ことわったじゃない…。」
「えっ…。うん…。」
「…あの時は気付いてなかったの。…でも…でもね、あの日から、キリの事、ただの幼馴染みに見えなくなったの。」
「…マリア…それって…！」
「…キリ、私、キリのこと、好きみたい。もし、まだ私を好きでいてくれるなら…私が好きだったら…付き合って下さい！！」
…言った…！！
…言えた…！！
私はキリを見つめる。キリも私を見てる。
「…オレ、優しくないぞ。無器用だし、アイツみたいに…シンみたいには出来ないぞ…それでも良いのか…？」
「それでいい。キリはそうしてくれるほうが良い！」
私は笑顔で答えた。
…キリは…私を抱きしめた…。
「マリア…。オレ、すっごく嬉しい…。ありがとな。」
「…キリ…。」
私たちは、こうして付き合うことになった。
ちなみに、このあと星修高校と華風高校は学校同士が合併し、星華（せいか）高校となった。

そのため星修の内部争いは自然消滅し、生徒会と反生徒会との争いもなくなった。
…でも…これは私たちが卒業した次の年から。
でも、シンは私とキリが付き合ったと知ったら、前ほど無茶な校則は作らなくなったらしい…。

―おわり―

結ばれたマリア様（後書き）

「マリア様に恋して！」、今回で最終話です。いかがでしたか？
初めは３話程で終るかな…と思っていましたが、結構続きました☆
私自身楽しみながら執筆できて、良かったです。
それではこの辺で。また別の作品でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1762a/

マリア様に恋して！

2010年10月9日01時45分発行